

命の給食

胆振地区 洞爺湖町立洞爺中学校 3年 毛利 郁也

「浩生の家のトマト美味しい！」

「郁也の家のブロッコリーも美味しいよ！」

僕の学校の給食では、地元で採れた、野菜が使われる。僕の家も農家なので、自分の家で採れた野菜が給食で出される。それを学校のみんが「美味しい」と言って食べてくれる。とても誇らしい気持ちになる。

僕の学校は食に対する意識が高い。ただ、栄養やバランスを考えているだけではない。食事のときのマナー、コミュニケーション、季節の行事、様々な「食に関する知識」を学ぶことができるのだ。

まず、給食は、先生方も生徒もみんな食堂に集まって食べる。学校にいる全員が集まる食堂、会話をしながら食べるので、より美味しく楽しく食べることができる。

また、年に二回、「花見弁当」と「もみじ弁当」と言って、重箱になったお弁当が全員に配られ、外で桜や紅葉を見ながら食べる行事がある。

自分にあった分量を選ぶカフェテリア給食、自分で栄養バランスを考えて食材を選ぶバイキング給食もある。

また、月に数回、栄養教諭の方が来て、栄養や季節の野菜、マナーなど、食の大切さについて話をしてくれる。このようなことは、どこの学校を回ってもなかなかないだろう。

栄養教諭の方が話してくださった中で、特に印象に残っている言葉がある。

「私が最終的に伝えたいのは、給食からみなさんの家庭のご飯に良い影響を与えることです。地元で採れた新鮮で美味しい野菜を食べ、自分で食材を選んだり栄養やマナーについて学んだことが、大きくなって自分で作るようになったときに、活かされてくる。今の栄養バランスや健康も大切だけれど、自分でそれができるようになることが伝えられたら良いなと思っています。そして、その時にこの洞爺の給食を思い出して作ってくれたら嬉しいです。」

僕自身、洞爺の給食を食べるようになって変わった。自分や友達の家で作っている作物が給食で使われているのを見ると給食を残さず全部食べるようになった。

僕も、土日や夏休みは、朝早くから夜遅くまで畑の手伝いをする。真夏に、一つ一つブロッコリーの苗を植えていくのは、大変な作業だ。キツイし嫌だと思ふこともあるけれど、一つの作物を自分の手で育てた喜びはとても大きなものだ。そして、自分が農業に貢献していることが何よりうれしいのだ。父や母がまるで人を育てるかのように愛情をこめて大切に命を育てているのも見てきた。このように生産者の気持ちがわかるにつれて嫌いなものでも食べられるようになっていった。

今、日本でも「食品廃棄」が大きな問題となっている。年間千九百万トンもの食料が廃棄されている現状がある。こんなに愛情をこめて生産者が作ったものが捨てられているかと思うと、いたたまれない気持ちになる。

また、産業廃棄だけではなく、食に関する「生活習慣病」「孤食」なども問題になっている。それは、僕たちの体の問題だけにとどまらず、精神にも影響を与えているという見方もある。その背景に、「食」に対する文化や知識が不足していることが考えられるのではないだろうか。

食事は、ただ食べるためのものではない。食事は命を学ぶことだと僕は思う。食事そのものが、動物や植物の命をいただくことにより成立している。そして、そこには、命を育む人たちの愛情や、食を作る人たちの使命がある。季節があり、文化を味わうことができる。そして、食べることは、食べる側の知識と感謝の気持ちがあって初めて成り立つものということをおぼえてはいけない。

洞爺の命の給食、その素晴らしさや知識を受け継ぎ、多くの人たちに、地域を超え、世代を超えて、伝えていくことが僕たちの使命だと僕は思う。